

日付:2016年1月17日／聖書:ヨハネによる福音書4:46～54

## 説教:「“言葉”を信じて帰って行った」

今朝の聖書は、奇跡物語。このところをどう読むかは大事になる。一人の父親がイエスを尋ねて来た。息子が死にかかっているという。藁(わら)をもすがる思いでイエスを尋ねて来たのかと思う。イエスはその父親に対して「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と厳しい言葉がかけられた。この父親は、息子が死なないうちに、数十キロ離れたカファルナウムまで来てくださと言う。神の「しるしや不思議な業」を求め、イエスを動かそうとしているわけだ。私たちも、多かれ少なかれ、神の「しるしや不思議な業」を求め、イエスを動かそうとし、祈りや願いに熱心になる。私たちにもやはり、「しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」という弱さがあるものではないか。そして神の「しるしや不思議な業」を求め、イエスを動かそうとし、祈りや願いに熱心になって行くものではないか。そういう弱さを覚える私たちにも、次の言葉が慰めとしてある。

「イエスは言われた。「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。」父親は、キリストの言葉を信じて、自分の生活の場に帰って行った時、キリストの“しるし”を見せられたのである。私たちは、ともすると「しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」事が優先しないか。私たちは、神の「しるしや不思議な業」を求め、イエスを動かそうとする祈りや願いに熱心になってはいないだろうか。「こうしてください、ああしてください」とキリストを連れまわそうとしていないだろうか。そういう私たちにも、キリストは常に言葉をくださっている事を覚えたい。

復活後のイエスと弟子たちとのやり取りにこういう事がある。「トマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」…イエスが…トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」…イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」」（神谷）